

女子大学生親子の年中行事の認知・経験と共食との 関連

著者	山本 いず美, 小川 眞紀子
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要. 人間生活学・児童学・食品栄養学編
巻 号	39 1
ページ	89-93
発行年	2015
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000058/

女子大学生親子の年中行事の認知・経験と共食との関連

山本 いず美[※]・小川 眞紀子[※]

The Relationship between the Awareness/Experience of an Annual Event, and Eating Together with Others in Female College Students and Their Parents

Izumi YAMAMOTO and Makiko OGAWA

The annual events which all subjects have experienced were New Year's Day, the day before the calendrical beginning of spring, Christmas, and New Year's Eve. The annual events female college students and their parents seldom experience were spring festivals and the Chrysanthemum Festival. The parents who eat with others carefully had a lot of experience of Vernal Equinox and autumn festivals. On the other hand, as children, there was a lot of experience of the Autumnal Equinox. Those who eat together with others carefully not only recognize various annual events, but it was suggested that participation in an event increases.

Key words : annual events, foods for special events, eating together with others

はじめに

年中行事は、特定の時期に毎年伝統的に行われる民間行事や祭事であり、地域性の高い行事食が供される。

岡山県の場合、正月以外の行事食の喫食割合が高い料理は、クリスマスのケーキ、大晦日の年越しそば、土用の丑のうなぎ、節分の巻き寿司などが挙げられる。また、年中行事の食事は、端午の節句のちまき、盂蘭盆のそうめん、お月見の団子、大晦日の尾頭付きいわし料理に備前、備中、美作の3地域による喫食割合の差異もみられる¹⁾。

近年では、ライフスタイルも多様化しており、行事の簡略化や行事食の内容も変化している。平成17年7月に施行された「食

育基本法」においても、栄養面だけでなく伝統のある優れた食文化や地域の特性を生かした食生活の重要性が示されている²⁾。しかし、生活様式や食生活が変化するにつれて、家庭で行事食を作って食べるといった機会も減少している。地域に伝承されてきた特有の食文化は、親から子へと伝承されない傾向があると考えられる。

行事食は、かつては生活のなかの大きな楽しみであり、行事食を通して行われる交流は日常の人間関係に反映された³⁾。また年中行事を通して、地域の人々や家族が集い、人々の交流の場となった。こうして、異世代で行事食を囲みながら食事を共にする良い機会を得ることにつながっていたであろう。

キーワード：年中行事，行事食，共食

※ 本学人間生活学部食品栄養学科

そこで本研究は、女子大学生とその親を対象とし、代表的な年中行事の認知・経験が共食状況に関連があるかを検討した。

対象および方法

1. 対象

対象者は、本学食品栄養学科4年生とその親（調理担当者）30組、合計60名とした。親の年齢は40歳代が9名、50歳代が21名であった。

2. 調査方法

調査は、平成21～23年日本調理科学会特別研究「調理文化の地域性と調理科学—行事食・儀礼食—」というテーマで行われた全国規模のアンケート調査⁴⁾と、共食に関する質問紙調査を実施した。

調査時期は、平成22年4月から7月の間、自記式質問紙を配布し、留め置き法にて行った。

3. 解析方法

データの集計および解析には、統計解析ソフトSPSS Ver.19.0 for windowsを使用し、クロス表の検定には χ^2 検定を、2群間の平均値の差の検定には、t検定を用いた。有意水準5%未満を有意差ありとした。

結 果

1. 年中行事の認知・経験（全体）

年中行事について知っていると答えた者の割合を認知度、経験したことがあると答えた者の割合を経験度とし、表1に示した。

対象者全員が認知していた行事は、正月、節分、七夕、お月見、クリスマス、大晦日であった。認知度が高い行事は、上位から土用の丑98.3%、冬至98.3%、上巳96.7%、春分の日95.0%、端午の節句95.0%、秋分の日93.3%、人日91.7%の順であった。認知度が低い行事は、春まつり35.0%、重陽

の節句26.7%であった。

対象者全員が経験していた行事は、正月、節分、クリスマス、大晦日であった。経験度が高い行事は、上巳96.7%、土用の丑93.3%、経験度が低い行事は盂蘭盆40.0%、秋まつり40.0%、春まつり20.0%、重陽の節句6.7%であった。春まつりと重陽の節句は認知度、経験度ともに低かった。

表1 年中行事の認知度・経験度（全体）

行事名	認知度 (%)	経験度 (%)
正月	100.0	100.0
人日	91.7	65.0
節分	100.0	100.0
上巳	96.7	96.7
春分の日	95.0	73.3
端午の節句	95.0	80.0
盂蘭盆	68.3	40.0
七夕	100.0	76.7
土用の丑	98.3	93.3
重陽の節句	26.7	6.7
お月見	100.0	73.3
秋分の日	93.3	66.7
冬至	98.3	73.3
クリスマス	100.0	100.0
大晦日	100.0	100.0
春まつり	35.0	20.0
秋まつり	51.7	40.0

2. 年中行事の認知・経験（親子別）

親子別の認知度、経験度を表2に示した。

親子で半数以上が認知しているが、子において経験が少ない行事は、春分の日、盂蘭盆、秋分の日、冬至であった。子において認知度、経験度が低い行事は秋まつりであった。

親子間で認知度、経験度に差があるか検定した結果、認知度において有意な差がみられた行事は盂蘭盆 ($p<0.01$)、重陽の節句 ($p<0.01$)、春まつり ($p<0.05$)、秋まつり ($p<0.01$)、経験度において有意な差がみられた行事は春分の日 ($p<0.01$)、秋分の日 ($p<0.01$)、春まつり ($p<0.05$)、秋まつり ($p<0.05$) であった。

表 2 年中行事の認知度・経験度（親子別）

(n)	認知度			経験度		
	親 (30)	子 (30)	群間差	親 (30)	子 (30)	群間差
正月	100.0	100.0		100.0	100.0	
人日	93.3	90.0		73.3	56.7	
節分	100.0	100.0		100.0	100.0	
上巳	100.0	93.3		100.0	93.3	
春分の日	100.0	90.0		90.0	56.7	**
端午の節句	100.0	90.0		86.7	73.3	
盂蘭盆	83.3	53.3	**	53.3	26.7	(+)
七夕	100.0	100.0		76.7	76.7	
土用の丑	100.0	96.7		96.7	90.0	
重陽の節句	46.7	6.7	**	10.0	3.3	
お月見	100.0	100.0		80.0	66.7	
秋分の日	100.0	86.7	(+)	90.0	43.3	**
冬至	100.0	96.7		83.3	63.3	(+)
クリスマス	100.0	100.0		100.0	100.0	
大晦日	100.0	100.0		100.0	100.0	
春まつり	46.7	23.3	*	33.3	6.7	*
秋まつり	70.0	33.3	**	56.7	23.3	*

数値：％，χ²検定，**：p<0.01，*：p<0.05，(+)：p<0.1

表 3 家族や友達との共食を大切にするか

(n)	全体 (60)	親 (30)	子 (30)	群間差
大切に	55.0	60.0	50.0	—
気にしない	45.0	40.0	50.0	

数値：％，χ²検定

表 4 家族や友達との夕食の共食頻度

(n)	全体 (60)	親 (30)	子 (30)	群間差
週に4,5日以上	71.7	90.0	53.3	**
週に2,3日以下	28.3	10.0	46.7	

数値：％，χ²検定，**：p<0.01

3. 共食について（親子別）

家族や友達との共食を大切にする人の割合は、親 60.0%、子 50.0%であり、親子で差はみられなかった（表 3）。家族や友達との夕食の共食頻度において、週に 4, 5 日以上の人には親 90.0%、子 53.3%であり、家族や友達と一緒に夕食を食べている人は、子に比べ親の方が有意に高かった（p<0.01）（表 4）。

4. 共食に対する意識と認知・経験（親子別）

共食に対する意識をみると、共食を大切に

表 5 共食に対する意識と年中行事の認知度・経験度（親）

(n)	認知度			経験度		
	大切に (18)	気にしない (12)	群間差	大切に (18)	気にしない (12)	群間差
正月	100.0	100.0		100.0	100.0	
人日	94.4	91.7		77.8	66.7	
節分	100.0	100.0		100.0	100.0	
上巳	100.0	100.0		100.0	100.0	
春分の日	100.0	100.0		100.0	75.0	*
端午の節句	100.0	100.0		88.9	83.3	
盂蘭盆	94.4	66.7		61.1	41.7	
七夕	100.0	100.0		83.3	66.7	
土用の丑	100.0	100.0		94.4	100.0	
重陽の節句	50.0	41.7		5.6	16.7	
お月見	100.0	100.0		83.3	75.0	
秋分の日	100.0	100.0		94.4	83.3	
冬至	100.0	100.0		94.4	66.7	(+)
クリスマス	100.0	100.0		100.0	100.0	
大晦日	100.0	100.0		100.0	100.0	
春まつり	55.6	33.3		38.9	25.0	
秋まつり	83.3	50.0		66.7	41.7	*

数値：％，χ²検定，*：p<0.05，(+)：p<0.1

表 6 共食に対する意識と年中行事の認知度・経験度（子）

(n)	認知度（％）			経験度（％）		
	大切に (15)	気にしない (15)	群間差	大切に (15)	気にしない (15)	群間差
正月	100.0	100.0		100.0	100.0	
人日	80.0	100.0		60.0	53.3	
節分	100.0	100.0		100.0	100.0	
上巳	93.3	93.3		93.3	93.3	
春分の日	93.3	86.7		66.7	46.7	
端午の節句	93.3	86.7		80.0	66.7	
盂蘭盆	66.7	40.0		26.7	26.7	
七夕	100.0	100.0		86.7	66.7	
土用の丑	100.0	93.3		93.3	86.7	
重陽の節句	13.3	0.0		6.7	0.0	
お月見	100.0	100.0		66.7	66.7	
秋分の日	100.0	73.3	*	66.7	20.0	**
冬至	93.3	100.0		60.0	66.7	
クリスマス	100.0	100.0		100.0	100.0	
大晦日	100.0	100.0		100.0	100.0	
春まつり	33.3	13.3		6.7	6.7	
秋まつり	46.7	20.0		33.3	13.3	

数値：％，χ²検定，**：p<0.01，*：p<0.05

意に高く、冬至では高い傾向がみられた（表 5）。子では、秋分の日において認知度、経験度ともに共食を大切に

する群が有意に高かった（p<0.05、p<0.01）（表 6）。共食の頻度をみると、親では共食の頻度と認知度に差はみられなかった（表 7）。子では週に 4, 5 日以上

表7 共食の頻度と年中行事の認知度・経験度(親)

	認知度 (%)			群間差	経験度 (%)		
	(n)	週に4,5日以上 (27)	週に2,3日以下 (3)		週に4,5日以上 (27)	週に2,3日以下 (3)	群間差
正月		100.0	100.0		100.0	100.0	
人日		92.6	100.0		74.1	66.7	
節分		100.0	100.0		100.0	100.0	
上巳		100.0	100.0		100.0	100.0	
春分の日		100.0	100.0		92.6	66.7	
端午の節句		100.0	100.0		88.9	66.7	
菫餅盆		81.5	100.0		51.9	66.7	
七夕		100.0	100.0		77.8	66.7	
土用の丑		100.0	100.0		96.3	100.0	
重陽の節句		48.1	33.3		7.4	33.3	
お月見		100.0	100.0		81.5	66.7	
秋分の日		100.0	100.0		92.6	66.7	
冬至		100.0	100.0		85.2	66.7	
クリスマス		100.0	100.0		100.0	100.0	
大晦日		100.0	100.0		100.0	100.0	
春まつり		48.1	33.3		33.3	33.3	
秋まつり		70.4	66.7		55.6	66.7	

数値: %, x2検定

数値: %, χ^2 検定

表8 共食の頻度と年中行事の認知度・経験度(子)

	認知度 (%)			経験度 (%)			
	(n)	週に4,5日以上 (16)	週に2,3日以下 (14)	群間差	週に4,5日以上 (16)	週に2,3日以下 (14)	群間差
正月		100.0	100.0		100.0	100.0	
人日		87.5	92.9		50.0	64.3	
節分		100.0	100.0		100.0	100.0	
上巳		100.0	85.7		100.0	85.7	
春分の日		87.5	92.9		50.0	64.3	
端午の節句		100.0	78.6	(+)	81.3	64.3	
菫餅盆		56.3	50.0		31.3	21.4	
七夕		100.0	100.0		81.3	71.4	
土用の丑		100.0	92.9		100.0	78.6	(+)
重陽の節句		6.3	7.1		0.0	7.1	
お月見		100.0	100.0		68.8	64.3	
秋分の日		81.3	92.9		50.0	35.7	
冬至		100.0	92.9		62.5	64.3	
クリスマス		100.0	100.0		100.0	100.0	
大晦日		100.0	100.0		100.0	100.0	
春まつり		6.3	42.9	*	0.0	14.3	
秋まつり		18.8	50.0	(+)	18.8	28.6	

数値: %, χ^2 検定, *: $p<0.05$, (+): $p<0.1$

表9 共食に対する意識と年中行事の認知数・経験数(親子別)

	(n)	全体 (30)	大切に する (18)	気にしない (12)	群間差
親	認知	15.4 ± 1.2	15.8 ± 0.9	14.8 ± 1.5	*
	経験	13.3 ± 2.5	13.9 ± 1.7	12.4 ± 3.1	—

数値: 平均±標準偏差, χ^2 検定 *: $p<0.05$

	(n)	全体 (30)	大切に する (15)	気にしない (15)	群間差
子	認知	13.6 ± 1.7	14.1 ± 2.0	13.1 ± 1.2	(+)
	経験	10.8 ± 2.4	11.5 ± 2.7	10.1 ± 2.0	—

数値: 平均±標準偏差, χ^2 検定 (+): $p<0.1$

表10 共食の頻度と年中行事の認知数・経験数(親子別)

	(n)	全体 (30)	週に4,5日以上 (27)	週に2,3日以下 (3)	群間差
親	認知	15.4 ± 1.2	15.4 ± 1.2	15.3 ± 1.2	—
	経験	13.3 ± 2.5	13.4 ± 2.2	12.7 ± 4.9	—

数値: 平均±標準偏差, χ^2 検定

	(n)	全体 (30)	週に4,5日以上 (16)	週に2,3日以下 (14)	群間差
子	認知	13.6 ± 1.7	13.4 ± 1.4	13.8 ± 2.1	—
	経験	10.8 ± 2.4	10.9 ± 2.1	10.6 ± 2.8	—

数値: 平均±標準偏差, χ^2 検定

5. 共食に対する意識と認知数・経験数(親子別)

共食に対する意識と年中行事の認知数・経験数との関連を検討したところ、共食を大切にする群において、認知数が親は有意に多く ($p<0.05$)、子が多い傾向がみられた(表9)。共食頻度と認知数・経験数との差は親子ともにみられなかった(表10)。

考 察

17の年中行事のうち、対象者全員が認知・経験している行事は正月、節分、クリスマス、大晦日であった。これらの行事は、中四国支部の県別の結果と一致していた⁵⁾。

親子ともに認知度・経験度の低い行事は、春まつりと重陽の節句であった。全国で認知度、経験度が低い行事は、重陽の節句、春まつり、秋まつりであった。本対象者は全国と比較すると親において秋まつりの認知度、経験度ともに高かった⁶⁾。

正月の行事食には、屠蘇、雑煮とおせち料理がある。しかし、屠蘇の喫食経験は低く、現在では正月の祝い酒としてビールやワインなどが飲食され、屠蘇に代わる酒類が食卓に上がっている⁷⁾。中四国支部の県別の正月料理の喫食率をみると、屠蘇の喫食率は鳥根県で最も高く59.3%、岡山県は最も低く32.6%であった。雑煮の喫食経験度はいずれの県においても90%を超えていた⁵⁾。全国結果で毎年食べる率が最も高い行事食は雑煮94.2%であり、全国結果とも一致していた⁶⁾。また、元日に喫食する料理は、地域の食文化に基づく料理であり、材料である食品だけでなく、その扱い方となる調理法も関係しており、正月料理には地域特性がみられ、全国が均一化ではないことが報告されている⁸⁾。

これらの結果から、行事食の内容は地域によって特性がみられることから、伝承される料理、衰退する料理に違いがあることが分かる。また、伝承される料理は古来よ

文 献

り受け継がれた形から、現代の生活に適した形へと変化して伝承していくと考えられる。

平成 25 年 12 月に実施された「食育に関する意識調査⁹⁾」によると、家族と一緒に食事をすることを重要と思っている人は 95.5% であり、共食を大切に思っている人は多い。共食に対する意識と年中行事の認知度、経験度から共食を大切にしている人は、親では春分の日、秋まつりの経験が有意に多く、冬至の経験が多い傾向があった。子では秋分の日が認知度、経験度ともに有意に多かった。また、共食を大切にしている人は、行事の認知数が親では有意に多く、子では多い傾向があった。共食を大切にしている人は、年中行事を多く認知しているだけでなく、行事の経験が多くなることが示唆された。

要 約

本学食品栄養学科学生とその親（調理担当者）30 組、合計 60 名を対象とし、17 の年中行事の認知・経験と共食との関連を調査した。

対象者全員が、認知・経験していた行事は、正月、節分、クリスマス、大晦日であった。親子ともに、認知度、経験度が低い行事は、春まつりと重陽の節句であった。

共食を大切にしている人は、親では春分の日、秋まつりの経験が有意に多く、冬至の経験が多い傾向があった。子では秋分の日が認知度・経験度ともに有意に多かった。共食を大切にしている人は、年中行事の認知数が親では有意に多く、子では多い傾向があった。共食を大切にしている人は行事を認知しているだけでなく、様々な行事経験が多くなることが示唆された。

- 1) 藤井わか子, 藤堂雅恵, 小川眞紀子, 山下広美, 我如古菜月, 大野婦美子: 岡山県における年中行事と通過儀礼の地域特性—3 地域(備前, 備中, 美作)の比較—, 日本調理科学会創立 40 周年記念誌, pp.35-39, 2013.
- 2) 内閣府: 食育基本法法律第 63 号, 官報号外第 134 号, 2005.
- 3) 洲上倫子編: 調理学, 朝倉書店, pp6-7, 2007.
- 4) 平成 23 年 2 月日本調理科学会「調理文化の地域性と調理科学」特別研究委員会: 平成 21 ~ 23 年度日本調理科学会特別研究「調理文化の地域性と調理科学」報告書—行事食・儀礼食—, 三原プリント印刷, pp1-20, 2011.
- 5) 武田珠美: 特別研究「調理文化の地域性と調理科学—行事食・儀礼食—」中国・四国支部, 日本調理科学会誌, 45 (1), pp.65-67, 2012.
- 6) 洲上倫子, 栗田寛子, 石井香代子, 木村安美: 特別研究「調理文化の地域性と調理科学: 行事食・儀礼食」—全国の報告—行事食・儀礼食の認知・経験・喫食状況, 日本調理科学会誌, 44 (6), pp.436-441, 2011.
- 7) 名倉秀子: 現代の食生活にみる行事食の特徴—正月料理を情報とした計量分析から—, 日本調理科学会誌, 45 (1), pp.1-8, 2012.
- 8) 名倉秀子, 大越ひろ, 茂木美智子: 元日の喫食料理に関する地域特性の分析, 日本家政学会誌, 58 (12), pp.753-762, 2007.
- 9) 内閣府: 食育に関する意識調査, 2014.